



2012年10月3日

千代田区教育委員会 委員長 中川典子 様

社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部 支部長 上浪 寛
同 保存問題委員会 委員長 左 知子
同 千代田地域会 代 表 赤堀 忍



千代田区立九段小学校・幼稚園校舎の保存・活用に関する要望書

拝啓 貴委員会におかれましては、日頃より文化の発展と継承に深く理解を示されていることに心より敬意を表します。

さてこの度、千代田区にて「九段小学校幼稚園施設整備検討協議会」が発足し、今年度中に施設整備方針を策定する方向で、7月より協議が開始されたことを伺いました。

ご承知のように、千代田区立九段小学校・幼稚園は、1923年の関東大震災で焼失した旧市内にあった小学校校舎を、東京市が全て鉄筋コンクリート3階建てで復興した117校の、いわゆる「復興小学校」のうちの1校で、1926(大正15)年8月に竣工しました。東京都ではわずか16校となってしまう「復興小学校」の中で最も歴史の長いものです。体育館以外の主要部分は竣工時に近い形で丁寧に使い続けられており、文化・建築史的価値が極めて高いと考えられます。

「復興小学校」の価値は、それだけではなく、震災で建物も人々の心も疲弊した都市を高い理想の下に(復旧でなく)「復興」するため働いた人々の叡智の結晶であり、復興予算の中に占める率も高く「復興」のシンボルでもあった点にもあります。事実、震災から東京が近代都市として生まれ変わる礎を築いたとして、「九段小学校」は、「東京駅」「日本橋」「清洲橋」「三井本館」などの重要文化財と共に、経済産業省により、「近代化産業遺産」に指定されています。

「復興小学校」には、耐震・耐火構造、避難・衛生・健康への配慮、地域とのつながり、地域のランドマークとなる意匠、公園と一体となった防災拠点機能などが当初の設計意図に含まれていました。(詳細は添付資料ご参照) これらは、現在の小学校にも求められているものであり、これまで九段小学校・幼稚園が現役として長く使われ続けてきた理由であるとも言えます。「復興小学校」の設計思想や設計規準は、現在の学校建築計画や建築基準法の規範に根拠を与えてきたと言えます。

このように、九段小学校・幼稚園の校舎は日本の近代化の象徴であると言っても過言ではなく、そこで学ぶ子どもたちばかりでなく、地域、さらに日本の国にとっても、かけがえのない宝物と言えます。

以上のことを踏まえ、千代田区が九段小学校・幼稚園につき、建設当初の校舎の機能更新を行い、これを全面的に保存活用した上で、必要な増築を行うなど、現在の教育環境に合った学校としてこれからも使い続けられるよう、委員会としてのご配慮を、ここに切望いたします。

この「使い続ける」という言葉につきましては、文部科学省にて8月に中間報告のあった「学校施設老朽化対策ビジョン」の中でも、次のように強調されています。

「学校施設は、それ自体が教育において欠かすことのできない一つの重要な要素である。だからこそ、この提言の中で触れた長寿命化を進めることにより、将来を担う子どもたちに、今あるものを大切に使い続けていくというメッセージを伝えたい。」

「大切に使い続ける」こと自体が得がたい教育効果を持つのみならず、世代を超えて同じ校舎で学んだ経験は、地域の絆ともなります。区内に唯一現存する「復興小学校」の九段小学校・幼稚園は、地域の記憶の証言者として千代田区らしさに欠かせないと言えます。

幸い、建物本体のコンクリート強度については耐震性能上問題ないという調査結果が出ております。保存活用の際には、法的規制や技術的問題を乗り越える様々な解決方法が考えられますが、その参考資料の一例を添付いたしますので、重ねて活用に向けてのご検討をお願い申し上げます。

なお、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同 保存問題委員会、同 千代田地域会は、千代田区立九段小学校・幼稚園校舎の保存活用に関して、専門分野の知識を活かした支援・助言を行うなど、出来る限りの協力をさせて頂きたいと思っております。

敬具